



# 遙かな国の冒険譚

始まりの物語・風の贈りもの

作 雪村月路 絵 みやこるり

## 始まりの物語

あるとき、大陸の北東に位置するイルエンという国に、二人の姫君がいた。

二人はいとこ同士で、北方特有の美しい青い髪と青い目をしており、顔かたちや雰囲気が高く似ていたので、周りの人々はしばしば二人を取り違えることがあった。また、二人のほうもそれを承知していて、わざとお互いに似せて楽しんでいるふうなところがあった。姫君たちは、年上のほうがアイリーン、年下のほうがマデリーンという名前だった。

その頃、悪しき魔女がイルエンを訪れた。魔女は高い山の上に居を構え、国王を脅した。王家の財と、アイリーン姫、マデリーン姫を差し出さねば、国民をみな石に変えるというのだった。国王は、国で一番力のある、魔法使いと、月の聖者と、太陽の聖者を呼んで対抗しようとしたが、魔女の力は強大で、抗いようがなかった。かろうじて、魔女の魔法を退けることのできる盾が二枚用意できただけで、誰かがこの盾を持って魔女を倒しに行かなければならなかった。

ところで、魔女が二人の姫君を望んだのは、自らの予言の力によって、二人のうちのどちらかが自分を滅ぼすと知り、己の手でこの姫君たちを葬ろうと決意したからだった。また、その予言は、国王側の術者たちにも知りうるものだったので、二人の姫君は予言どおりに魔女を倒しに行かなければならなくなった。しかし、どのようにすれば魔女を倒せるのかはわからなかったうえ、魔法を防ぐ盾は重すぎて姫君たちには使えなかった。

ちょうどこのとき、内陸のふたつの国、リーデベルクとクルシュタインの王子は、それぞれ花嫁を見つけるべく、共に旅をしてイルエンにたどり着いたところだった。二人の王子は、アイリーンとマデリーンを正しく見分けることができ、リーデベルクの王子はアイリーンと、クルシュタインの王子はマデリーンと、それぞれ将来を誓いあった。二人の王子は、二枚の盾を持って、姫君たちとともに魔女を倒しに行くことにした。

王子たちと魔女との間に、熾烈な戦いが繰り広げられた。だが、魔法を防ぐ盾が役に立った。石の魔法も、火の魔法も、雷の魔法も、王子たちを傷つけることはなかった。ついに、王子たちは魔女の首を胴から切り離し、勝利を収めた。予言とは異なる結末だったが、みな安心し、その場を離れて、疲れ切った体をしばし休めた。

ひとり、マデリーンだけが、不安を覚え、勇気を振り絞って、魔女の首の転がっているところまで戻って行った。すると、どうだろう、魔女の首はぶつぶつと呪文を唱えている最中だった！ マデリーンは悲鳴をあげて、魔女の首を、近くを流れている小川に押し込んだ。魔女は小川の中で、カッと目を見開いてマデリーンを見つめた。

「おまえだったのか。おまえが私を滅ぼす娘だったのか。おまえは・・・」

マデリーンは、とっさに機転を利かせて、肩越しに振り返って叫んだ。

「こっちに来ちゃだめよ、マデリーン！」

「おまえは・・・アイリーンだね」

魔女はにたっと笑った。

「おまえの現在ではなく、未来を呪ってやろう、アイリーン。おまえには子は生まれない。もし生まれたとしても、すぐに死ぬる。もし生き延びたとしても、年頃になったとき、自分の国の自分の城で、気がふれて、やっぱり死ぬるだろう」

そして、魔女はごぼごぼと水を飲んで溺れ、今度こそ滅んだ。

他の三人が駆けつけて来たとき、マデリーンは小川のほとりで泣いていた。彼女はクルシュタインの王子を愛していたし、その花嫁になる資格がなくなったような気がしたからだ。アイリーンも話を聞いて顔を曇らせた。もしかしたら魔女の呪いは、名を呼ばれたアイリーンにかかっているかもしれなかったからだ。

一行はともかく山を下りて、国王に報告をした。国王は魔女の滅んだことを喜ぶとともに、二人の姫君のことを心配し、呼び集めた魔法使いと、月の聖者と、太陽の聖者とに、呪いのかかり具合を調べるように命じた。二人の姫君は呪いの影響の少ないことを祈った。

やがて結論が出ると、代表して魔法使いの老婆が報告をおこなった。

「申し上げます。魔女の呪いはお二方にかかっておりますが、名前を取り違えたせいで、だいぶ和らいでおります。

まず、魔女の三つの呪いのうち、一つ目の、子が生まれない呪いは、アイリーン様にかかっております。が、和らげられておりますので、おひとりのお子を授かることはできましょう。そして、そのお子は健やかにお育ちになるでしょう。

残りの二つの呪いは、マデリーン様の最初のお子にかかっております。

二つ目の呪い、子が生まれてもすぐに死ぬる呪いは、和らげられておりますので、すぐに死ぬることはありますまい。ただ、代わりに、たいそう体が弱くてお生まれになるでしょう。よくよく気を付けてお育てにならなければなりません。

最後の呪い、自分の国で気がふれて死ぬる呪いについてですが、これだけは、弱まることなく効力を発揮してしまいます。たとえお子が結婚して別の国に住まわれたとしても、今度はそこが、そのお子の「自分の国」。人間の国にいる限り、逃れることはできますまい。われらが知恵を絞って考えました結果、このようにするのはいかがでしょう。

この三つ目の呪いは、お子の誕生日を契機として発動するものと見受けられます。われらは、これを事前に察知できるよう、ナイフを一本用意いたしました。お子が生まれましたら、このナイフにて、髪一筋を切り落としてくださいませ。その後、このナイフの刃が磨かれて泉のように清らかな間は、お子の身は安全でございます。しかし、このナイフの刃が血に濡れたように赤く染まりましたなら、次の誕生日を迎えさせる前に、必ずお子を国から出して、聖泉〈真実の鏡〉を目指させるのです。そして誕生日を迎えてから〈真実の鏡〉を覗けば、呪いは目に見える形で立ち現れることになりましょう。蛇か、鎖か、鍵か。いずれにしても、その呪いを滅ぼせば、お子は自由の身となりましょう」

姫君たちは魔法使いたちに礼を言って、マデリーンはナイフを受け取った。アイリーンはマデリーンに、

「あなたの子が聖泉を目指すときには、私の子も一緒よ」

と約束した。マデリーンは力づけられ、ありがとうと微笑んだ。

かくして、リーデベルクの王子はアイリーンを、クルシュタインの王子はマデリーンを、それぞれ伴って祖国に帰り、華々しい結婚式がとりおこなわれた。

1年後、アイリーンは男の子を出産した。予言通り、健やかな王子だった。

そのしばらく後、マデリーンは女の子を出産した。予言通り、病弱な王女だった、が、数年後に妖精たちの助力を得、健やかに育つこととなった。マデリーンは毎晩、王女の髪を切ったナイフを眺めては、刃が泉のように清らかなのを見てほっとするのだった。

そして月日は流れ、ある晩ナイフは血のように赤くなり、王子と王女は旅に出ることになる――。

(完)

## 風の贈りもの

旅する王子と王女は、あるとき、丘がいくつも連なる土地を通りかかった。

やわらかな緑に包まれた丘を、ふたり、馬に乗って進んで行くと、ひとつめの丘を越えたところで、子供が二人、座りこんでいるのを見つけた。

子供は、片方が男の子、片方が女の子で、こざっぱりしたお揃いの服を着て、ともに十にも満たない幼さだった。そっくり同じ銀色の髪をしており、疲れ切った様子で草の上にへたりこんでいたが、旅人たちに気づくと、立ち上がり、手を振ったり叫んだりした。

王子と王女は、子供たちのそばで馬を止めて降りた。あたりを見回したが、ほかに人影はない。見れば、子供たちはふたりとも泣いており、しきりに訴える言葉を聞けば、「あるじさまを、たすけて。おねがい。あるじさまを、たすけて」

と言うのであった。

フィリシア姫は、かがんで、子供たちの話をよく聞いてみた。どうやら、子供たちは、どこかの令嬢に仕えているらしく、その令嬢が、この先の「ずっとずっと向こう」で立ち往生しているらしい。幼い忠臣たちは、助けを呼びに歩いて来たのだが、誰にも出会うことができないまま、ここまで来て、疲れて歩けなくなってしまったのだという。

フィリシア姫は、思案して、王子に提案した。

「そのかたを早く見つけてさしあげましょう。私は子供たちと一緒にゆっくり行くから、あなたはその駿馬で、先に行って探してくださらない？」

フルート王子は、もっともな意見だと思いはしたものの、この先、丘をいくつ越えるかも分からないのに、非力な姫君と子どもたちを残して行くわけにもいかなかった。

「みんなで行こう。このくらい小さな子供なら、ぼくたちが一人ずつ抱えて乗れるだろう」

王子は男の子を、王女は女の子を抱えて馬に乗り、出発することとなった。

ところが、丘をもうひとつ越えたところには、その子らの女主人の代わりに、またもや二人の子供たちがいた。先の二人と同じように銀色の髪をして、ベソをかきながら、「あるじさまを、たすけて。おねがい。あるじさまを、たすけて」

と繰り返すのだった。王子と王女は相談して、自分たちは馬を下り、子供たちを二人ずつ馬に乗せて、ふたたび出発した。

3つめの丘を越えたところには、誰もいなかった。子供たちは心配そうに、馬の上で、「もっと先！ もっと先！」と騒いだ。

4つめの丘を越えたところにも、誰もいなかった。子供たちは泣きながら、「もっと先！ もっと先！」と騒いだ。

5つめの丘を越えると、丘のふもとに小川が流れているのが見えた。川のほとりには、銀色の髪をした女性がひとり伏していた。4人の子供たちは、口々に、「あるじさま！ あるじさま！」と呼ばわって、大騒ぎした。

王子と王女は、子供たちが馬から落ちないように気を付けながら、急いで丘をくだった。倒れているのは美しい娘で、晴れ着に身を包んでいるが、ほかに付き添いはいないようだ。

二人は娘を助け起こした。王女は娘を介抱し、王子は騒ぐ子供たちを馬から下ろしてやった。

「あるじさま！」「あるじさま！」「あるじさま！」「あるじさま！」

子供たちは泣き叫びながら、気を失っている娘に飛びついた。1人は右腕に、1人は左腕に、1人は右足に、1人は左足に。と、次の瞬間、子供たちの姿はすっと消えて、娘の両腕には銀色のブレスレットが、両足には銀色のアンクレットが嵌っていた。

王子と王女は、驚いて顔を見合わせたが、そのとき、娘は身じろぎして、目を開けた。フィリシア姫が、あわてて覗き込んで、

「だいじょうぶですか」

と声をかけると、ぼんやりと王女の顔を見つめてから、「はい」と答えて微笑んだ。ゆっくりと体を起こし、異国の言葉で何やら言いかけたが、通じないと気づくと、はにかんだように笑いながら、たどたどしく言った。

「ありがとう、ございます。私は、今日は、結婚するでしょう。すでに、朝は、人でした。飛べないを、歩きます。近いでした、とても遠い、休みました」

フィリシア姫は曖昧に頷いた。嫁ぎ先が思ったより遠い、というような意味だろうか。美しい娘は、ほっと息をついて、にっこり笑った。

「心配の助けを、お礼、おまもりです。ほかはありません」

銀色の腕輪を片方外して、王女に渡そうとした。

けれども、フィリシア姫は、さっきの子供たちが「あるじさま」をどれだけ慕っていたかを覚えていた。それで、礼を失しないように気を付けながら、そっと言った。

「そのように大切なものを受け取るわけにはいきません。その腕輪もあなたを慕っています。通りかかっただけですから、どうぞお気になさらないでください」

娘は困った顔をした。

「お礼、本当の心、ほかがありません」

腕輪を嵌め直しながら、娘は何か考えて、しばらくして、ぱっと顔を輝かせた。

「おまもり、歌は良いですか？ 今は人、風でした、変わらない。風を困る、歌って」

すうっと息を吸って、透き通った声で、不思議な節回しで、歌った。

「風よ、あなたの。娘の、友を。守って。ここに、いるよ——」

うながされて、フィリシア姫も歌った。繰り返して三度歌うと、やわらかな風が吹いて来て、王女の周りを一巡りしてから、丘と丘の間を吹き抜けて行った。

「優しい、忘れません。風、あなた、私」

娘は満足そうに言って、立ち上がった。小川の脇の小道に立ち、ほがらかに言った。

「あと少し。心配ありません。元気です。ありがとう。さよなら」

「さようなら。お元気で、お幸せに」

娘はうなずいて、軽やかに身をひるがえし、飛ぶような足取りで歩き出すと、もう振り返らなかった。

フィリシア姫は、王子と馬のほうを振り返った。ふと、思いついて言った。

「もしかして・・・風の精だったのかしら？ 嫁ぐために、人になったのかしら？」

「そう聞くと、そうとしか思えないな」

と、フルート王子は笑った。

そして二人は、少し幸せな気分になって、めいめいの馬に乗り、旅に戻ったのだった。

(完)

始まりの物語・風の贈りもの

<http://p.booklog.jp/book/97421>

著者: 雪村月路

著者プロフィール: <http://p.booklog.jp/users/ariadnemaze/profile>

ブログ: <http://snow-moon.cocolog-nifty.com/>

絵: みやこるり

Twitter: @\_385g

Pixiv ID: 18058190

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/97421>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/97421>

電子書籍プラットフォーム: ブクログのパバー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社: 株式会社ブクログ



～ 作者より ～

世界の各地に伝えられている伝説を集めていたら、旅を運命づけられた王子と王女の姿が浮かんで来たので、ひとつながりの物語として編むことにしたのです……と。

そんなふうに読んでいただけたら嬉しい旅物語の、そもそもの発端、旅の由来にあたる部分を綴りました。

ここから始まる様々なエピソードによって、色とりどりのときめきをお楽しみいただけたらと願っています。

(雪村月路)

～ イラストレーターより ～

今回「遙かな国の冒険譚」という作品に、イラストで関わられた事を本当に嬉しく思います。

この作品に相応しい表紙をと思うと悩む事もありましたが、手前の王子と姫、そして2人を見守る様に手を合わせている母達、さらにその後ろには魔女の影……という、この物語の世界観に読者の方々を惹き込む様なイラストを心掛けて、なるべく私の感じたままに制作する事ができました。

これから読む方がこの美しいファンタジー、始まりのお話を楽しんで頂けたら幸いです。

素晴らしい機会をありがとうございました。

(みやこるり)